

文学と歴史◆日本エア・リキード

小倉 一純

◆文学との関係

かつての神戸本社（現・神戸大丸の隣）は、作家・大岡昇平の小説の舞台となっている。

大岡がフランス語の翻訳係として、神戸の帝国酸素（日本エア・リキードの旧社名）に入社したのは昭和十三年のことである。

昭和三十年には小説『酸素』を新潮社より発表する。

以下は、その書き出しの一節。

一人の小男が舷側にもたれ、陸を眺めていた。海はまだ暗かった。波を消された港の水が広がっていた。ドック、突堤、倉庫、起重機、煙突など、港の水際を形づくる設備が、さまざまの光度の燈火を、飾花のようにつけたまま、次第に輪郭を現わそうとしていた。遠く背景の六甲の山は、茜色にあげかける四月の空に影絵を描き、その襞ひだの文様を明らかにするつもりらしかった。

―大岡昇平『酸素』第一章より

以下は、あらすじ。

神戸の「日仏酸素株式会社」は海軍と結びついて造船用の酸素を納入していた。その会社にはひとりの青年が翻訳係として採用されたが、彼は非合法活動のために特高（特別高等警察）に追われる身だった。日ごとに緊迫の度を増す開戦前夜の暗い時代相の中に、実業家、軍人、地下活動家、女流画家などさまざまなに入り乱れる多彩な人物群像、幾重にもからまり合う恋愛心理を冷徹な筆に描く長編。

◆日本エア・リキードという会社

帝国主義時代の日本において、外資系（フランス系）の企業であることをカモフラージュするため、この社名「帝国酸素」がつけられたといわれる。のちに、テイサンと改称。

というのも、帝国酸素は産業ガス（工業ガスとも）の会社である。

当時、この会社の「アセチレン溶接」の技術は軍部に重宝されていた。特に、神戸には、三菱重工神戸造船所、通称・神船（しんせん）があり、そこでは軍艦や潜水艦を建造していた。

日本の帝国主義が戦争に向かう最中、そんな帝国酸素の技術は必要不可欠であった。

テイサンは、外資系企業ではあるが、一方で、神戸の地場産業らしい企業風土を有していた。本社も神戸市内（神戸市中央区磯辺通）に置かれていた。

その後、東京都港区虎ノ門一丁目にあった旧日本ガス協会ビルに本社が移転した。社名も、日本エア・リキードと改称された。さらに本社が、港区芝浦のグランパークタワーに移転し、現在に至る。